

「だれもがやり直せる社会へ」

太田市立沢野小学校 六年 工藤 有

人間はだれしも失敗をする。しかし、その失敗が「犯罪」や「非行」という形になったとき、社会の目はとたんにつめくなる。テレビのニュースを見ながら、「自業自得だ」「社会から引きずるべきだ」と感じてしまう自分がいた。しかし、「社会を明るくする運動」の存在を知り、私はハッとさせられた。この運動が目指すのは、罪を犯した人をただ排除することではなく、地域で受け取り、二度と過ちを繰り返させないことだからだ。一度過ちを犯した人は、もう二度と私たちの仲間にはもどかれないのだから。私は、学校生活のあるべきことをきいて、この問題について深く考えるようになった。

私たちの日常にも、これと似た空気がひそんでいるからだ。学校生活の中で、だれかがルールをやぶったり、クラスの輪を乱すような失敗をしたりしたとき、周囲の空気は一変

する。直接、言葉で責めなくても、だけれども話
し分けなくなったり、遠くから見たりす
る「無言の排除」が殆どなのだ。私もかつて、
周囲のつめたい空気に流され、失敗した仲間
から「そ」と目をそらしてしまっただけがある
「関わりがない方が無難だ」という自分とする
気持ちと、「自業自得だ」というゆがんだ正義
感があつたからだ。しかし、周囲がらこり
つさせられた本人の表情を見たとき、私は胸
が痛んだ。私たちは正義を守っているつもり
で、実は一度つまずいた仲間から「反省して
やり直すチャンス」をうばい、さらに深く
らねみ入とおいつめていただけなのでは
ないのか。この「一度の失敗も許さないつめ
たさ」こそが、私が無意識に作り出していた
かばだ。たのびと気づかぬ。この結果は
社会における「犯罪や非行からの立ち直り」
と全く同じではないだろうか。調べてみると、
一度罪を犯してしまっただけが再び同じ過ちを
くり返してしまう背景には、「はきかたないし

「住む場所がない」そして何より「社会に居場所がなく、一人ぼっちになってしまった」という現実があることを知った。一度の失敗で、会がら完全に無視されてしまったのは、だれだって生きる気力を失い、再びくたやみ人ともどってしまふ。本当に必要なのは、厳しい目つきでつき放すことではない。過ちを深く反省したあとに、「ここからまた新しくやり直そう」と手を差し伸べることだ。地域の中でボランティアの人たちが対話を続けるのも、彼らに「あなたは一人ではない」という安心感を与え、社会とのいすばしなさをなきとめるためなのだ。と理解できた。

社会を明るくする運動のジ・ホールは「苦しい羽根」だ。黄色は、無事に帰ってくることを待つ家族や、地域の温かさを表す色だという。私たちが生きている社会を本当に「明るく」するためには、犯罪のない安全な街づくりを進めると同時に、過ちから立ち直ろうとする人を包みこむ「心の余ゆり」を一人ひとりが

持つことが欠かれない。私はまず、自分の身
近な学校や地域で、失敗した人を冷たい目で
見捨てない人望でありたい。一度つまずいた
人が、二度目のスタートラインに堂々と立て
る社会。それこそが、本当の意味でだれもが
安心してくらせる、真に明るく社会なのだ
と確信している。